

新緑随想

私、漫才師をしております。宮田陽（みやたよう）という芸名で、宮田昇（みやたしろう）という相方とコンビを組み、浅草演芸ホールや新宿末広亭など都内の演芸場に日々出演している、いわゆる寄席（よせ）芸人つてヤツです。

お客様は年配の方中心。最近では夜公演より昼公演のほうがお客が多かったりします。東京もお年寄りの夜は早いのです。こうして高齢化社会を実感する毎日ですが、寄席以外の公演も頻繁にあり、その客層や場所は多岐にわたります。ホテルのパーティーの余興もあれば小学生相手の学校公演なんかも頻繁にあるんです。もちろん、その場の客層になるべくあったネタをやるわけですが、先日は、朝小学生、昼演芸場、夕方老人ホーム、夜フイリピンパブで仕事があり、さすがに最後は頭が混乱してきて、気付いたらフイリピンパブのお客様に、小学生用の桃太郎のネタをしていました。なぜか従業員のフイリピン女性は笑ってました。

語の間に挟まれていろどりを添え、お客様をリラククスさせ雰囲気を変えるのが役目です。持ち時間は基本15分なのですが、前に出ている落語家さんの壱が長くなったときは8分に、短かったときは17分にといったように、出番の直前に今日の持ち時間が確定します。色物には、時間をもとの予定表通りに戻す時間調整

寄席芸人

漫才師の日常

斎藤 敬 (昭和62年卒)
(芸名・宮田 陽)
文化庁芸術祭賞新人賞受賞



終わるようにします。お客様に喜んでいただくことと同じくらい、時間を合わせることに色物は命を懸けているのです。命を懸けすぎて、お客に全くウケなかったのに時間をぴたり合わせられたと大喜びしている本末転倒な先輩もいます。

この仕事の一番良いところは、シンプルなどころだと思

本の漫才の世界では、「面白かった」といわれた時は純粹に漫才師が良かったということなのです。逆につらいところも結果がすぐに出るところです。

笑いたくて来た人が笑えないということは、お金を頂戴したうえで苦痛な時間を与えていることになるわけで、そのイヤな空気はにらみつけるようなお客さんの視線から漫才の最中にひしひしと伝わってくるわけで、15分が何時間にも感じられるわけで・・・けどそんな時も、失敗は決して引きずってはいけません。毎日がウケたりすべったり連続なのですからいちいち落ち込んだりしていら神経が持ちません。ではウケなかったときどうすれば落ち込まずに済むのか？先輩からは、正しい対処方法は全て相手のせいにするのだと教えられるました。だから漫才コンビは大概仲が悪いのです。中には「今日は客が悪かったな」と、ウケないのをいつもお客さんのせいにして、メチャメチャ仲の良い先輩コンビもいますが・・・ある意味、心を鈍感に出来るかが、この仕事を長く続けられるコツな気がします。

は役者志望だったんです。うちの相方は、松田優作になりたい！と大志を抱き広島から上京し、縁あって当時座長をしていた私の劇団に入団してきたのですが、身長160センチそこそこで西ローランドゴリラに似た顔でよくも大それた夢を持たたものです。もちろん松田優作にはなれませんでした。その劇団は経営不振で解散し、家賃も払えなくなった私は相方のアパートに居候させてもらいます。その時期私は借金返済のためホストクラブで働いていましたが、相方に誘われ漫才をはじめ、それがまさかの職業になってしまったわけです。相方には感謝してます。おかげで今、毎日がとてもスリリングに過ごせてるわけです。まあ元を正せばモノにならなそうな役者志望を劇団員にしてやった私がすごいのですが。

寄席の世界は80歳を超えて現役バリバリの強者が何人もいます。上がつかえているので60代でまだ中堅、40代の私はまだまだ若手に分類されます。初老なのに若手・・・道のりはとてつもなく長い。でもいつか、最高に面白いじじいと言われる日がくるように、私は長生きを心がけます。長生きも芸のうち。芸人万歳！

宮田陽・昇はどちらも最初